

Program

11/4 (金)

1 日目

Food 柿豚 × つむぎや

12:00 open

12:00～「つむぎや弁当」(限定30食)
＋お茶とお茶菓子
※柿豚おつまみセットをご用意しております。

16:00 ⑤日本茶ワークショップ
(予約制 / 当日受付可)

18:00～「つむぎや夜の献立」

19:00 ①中川哲雄の「うきは語り」

20:00 ②生産者とプロデューサー対談

21:00 close

11/5 (土)

2 日目

Food 柿豚 × 若松亮太

12:00 open

12:00～「うきは弁当」(限定40食)
＋お茶とお茶菓子
※柿豚おつまみセットをご用意しております。

14:30 ③生産者＋柿豚会会長
＋柿豚会プロデューサー「柿豚座談会」

16:00 ⑤日本茶ワークショップ
(予約制 / 当日受付可)

18:00～「うまか！きゅうしゅうははの味」(要予約)

18:00～18:15 若松亮太「食 トーク」

21:00 close

11/6 (日)

3 日目

Food 柿豚 × マンゴスチン

12:00 open

12:00～「マンゴスチンランチ弁当」(限定60食)
＋お茶とお茶菓子
※柿豚おつまみセットをご用意しております。

14:00 ④プロデューサーとマダム対談
「これからは物言う生産者へ」

16:00 ⑤日本茶ワークショップ
(予約制 / 当日受付可)

17:00 close

※①～⑤の詳細は裏面をご参照下さい。



育てる人々 杉 勝也

すぎ・かつや



福岡県うきは市で養豚から、ドイツレンピのハムソーセージの製造販売まで一貫経営。ハムソーセージ屋にはカフェを併設し、そばを流れる大河筑後川から名付けたリバーワイルドの看板を掲げる。ひたすら美味しい肉質の生産をめざし、モットーは「我が道を行く」。

1971 年 3 月生まれ

秋吉智博

あきよし・ともひろ



リバーワイルドの対岸に位置する朝倉市杷木（はき）地区。その南向きの斜面に広がる農園で、柿と葡萄をつくっている。柿は、県内数千戸の柿農家の中で、唯一の減農薬・減化学肥料栽培認証の取得実績を持つ。モットーは「柿本来の力で育つ本来の柿の味に近づける」。

1980 年 5 月生まれ

鎌浦 督

かまうら・すすむ



うきはの西、田主丸地区（たぬしまる）で、水稻、トマトをつくっている。10 ヘクタールの広大な水田で育成する水稻は、栽培期間中は農薬を一切使わず栽培。肥料も化学肥料は使用せず有機肥料のみで育てる。モットーは「とにかくやってみる」。

1980 年 9 月生まれ

つくる人々 つむぎや

松浦裕＋金子健一



男性 2 人のフードユニット。雑誌やイベントで、和食ベースのオリジナル料理を提案。イベントでは、九州うきはの旬の食材たちを、和のエッセンスを取り入れたお料理に仕立てて皆さまにお出しする予定。「あっぱれ！おにぎり」など著書多数。新刊「がっつり！粉ものごはんの本」が 10/28 に発売予定。

若松亮太

わかまつ・りょうた



柿、豚、米、それぞれの生産地に通い、くみ取った生産者の想いや、うきはの風景を丁寧に表現した味を提案。酢味噌和えの小品「ぬたえ」や、柿豚のバラ肉の高菜蒸し、柿の葉寿司、半生の干し柿を使った菓子。どれも地域の味と生産者のやさしい気持ちが絡み合った逸品ぞろい。11 月より福岡在住。

マンゴスチン

齋藤大典



パーティーケータリングや CM、映画、コンサートのホットミールケータリング、食と音楽の MIX UP PARTY『MUSICO』のオーガナイズまで幅広く活動する旅するケータリングチーム。今回は、九州の美味しい食材を、世界各国の美味しいお料理にアレンジしたお弁当。マンゴスチン得意のエスニックで柿豚を味わい尽くす。

江副直樹

えぞえ・なおき 柿豚会プロデューサー

大学中退後、米穀店店員、工場作業員、釣り雑誌編集者、コピーライター等を経て、現在事業プロデュースの会社、ブンボ株式会社代表取締役。農業、商業、工業、観光、地域活性など、多分野の多様なクライアントに対する、コンセプト重視の事業戦略提案とその実現が主な仕事。福岡県朝倉郡東峰村在住。

大竹昭子

おおたけ・あきこ 東京柿豚会会長

ノンフィクション、エッセイ、小説、写真評論など、ジャンルを横断して執筆。トークと朗読の会〈カタリココ〉は 5 年目。また東日本大震災後、詩人や作家に呼びかけて始まった「ことばのボトラック」は、現在サラヴァ東京で開催中。最新刊は『彼らが写真を手にした切実さを』（平凡社）、『読むとどれかに語りたくなるーわたしの乱読手帖』（中央公論新社）。著書多数。

中川哲雄

なかがわ・てつお

2006 年、ひと夏を過ごしたヒマラヤの辺境ラダックで、まるで近代合理を咽う（わらう）かのような暮らしの濃さと豊かさにすっかり魅了される。帰国後、日本にもまだ近代合理を咽って（わらって）くれる「何か」を探し求めるうち、口承「語り」の文化と出会う。以後、モノガタリの修行中。

